

中日新聞コラム「琵琶湖と環境」の軌跡

秋山 道雄
環境政策・計画学科

1. はじめに

20世紀があと2ヵ月ほどで終わろうとする2000年11月の初めから、中日新聞土曜日の子供欄で「琵琶湖と環境」というコラムが始まった。これが始まる発端は、環境科学部年報第6号(2002)の「私のこの一年」という短文で紹介したことがある。この文章では当時のいきさつに加えて、執筆をめぐる課題にも触れているので、注にその全文を掲げておこう¹⁾。

これを依頼された当初は、コラムをいつまで続けるかという期限の設定はとくになく、いけるころまでいこうというものであった。それ以後、環境科学部の教員や院生がリレーで書き継ぎ、2010年5月31日の記事を最後にコラムを終えることになった。足かけ11年、正味9年7ヵ月というロングランの連載である。

執筆に関わったのは、教員48名(非常勤講師を含む)、院生・学生19名の計67名であった。環境科学部の教員数は時期によって多少の変動はあるが大体55~56名の水準なので、85~86%の教員が執筆したことになる。教員の学科別内訳をみると、環境生態学科14名、環境政策・計画学科10名、環境建築デザイン学科6名、生物資源管理学科18名となっている。院生・学生の場合は、環境生態学科5名、環境政策・計画学科9名、生物資源管理学科5名である。コラムが継続していた10年ほどの期間に、執筆を依頼していた方が定年退職されたり、途中退職されたりで、執筆されないままになっているケースがある。したがって、予定されていた方々が計画通り執筆されていると、もう少し執筆者は増えたことであろう。

「琵琶湖と環境」というコラムの名称からは、その内容が環境科学部の教員が関わっている研究や教育の内容と強く関連するという印象をあたえる。事実、コラムの執筆はそのラインに沿って展開してい

ったが、実際には琵琶湖や環境をめぐる話題をもう少し越えたところまで及んでいる。これは、本学部の教員がカバーする範囲がそれだけ広いことを示すものであろう。本稿の文末に執筆一覧(著者とタイトル)を掲げておいたので、詳しくはそれをご覧になって頂くと具体的に則してご理解頂けるのではないかと思う。

連載が始まった当初はいつまで継続できるかわからなかったもので、とりあげるテーマを「琵琶湖と環境」に関わる話題を網羅するという意図していなかったが、4~5年を経て連載が軌道にのり、順次「琵琶湖と環境」をとりまく話題のつながりができるようになると、できれば教員や院生の執筆によって「琵琶湖と環境」に関わる話題をかなりのところまで網羅できるようにしたいという意欲が湧いて、以後の執筆につないでいくこととなった。

コラムが終了した後、この軌跡を記録しておくために執筆一覧をまとめ、あわせてこれまでのコラムを収集する作業を進め、それらのコピーを作成した。これをみると、たんに過去の記録を残しておくという意義だけでなく、今後に向けてこれを研究や教育で活用していける可能性を孕んでいることがわかってきた。

2. コラムの実績

コラムは全部で430編ある。全体を10年間とすると、1年で平均43編のコラムが書かれたことになる。1年50週のうち、年末年始やゴールデンウィークには新聞社が特集を組むので、通常のコラム等は休載となることがある。現実には、各年のコラム掲載回数は表1の通りであった。

2000年は11月と12月の2ヵ月だけ執筆し、2010年は1月から5月までの5ヵ月が執筆期間であったため、他の年より少ないのは当然として、残り9年間をみると40回から50回までの開きがある。

表1 各年のコラム掲載数

2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010
8	49	50	49	44	45	42	40	44	43	16

最初のうちは50週に近い執筆実績を示しているが、5年を経る頃からやや中だるみの傾向が出てきたことを確認できる。原則は、毎週連続して執筆することになっているが、著者によっては学会その他の仕事が重なって執筆ができなかったという週があったかもしれない。あるいは、予定していた資料や写真が整わなくて1週見送ったというケースがあったことも想像できる。事情はいろいろあるにせよ、連載が途中で休載となるというケースが幾度もあったにもかかわらず、歴代の中日新聞彦根支局長がこれを受け容れるという寛容さを示して頂いたことには心より感謝したい。

各筆者に執筆を依頼する際には、その方の専門に近いテーマを事例として示し、たとえばこのような話題について書いて頂きたいと述べ、しかし執筆内容にしばりはないので、これ以外の事項で希望されるものがあれば自由に取りあげて頂きたい、という依頼をした。その結果できあがったのが、執筆一覧にみられるような内容である。湖のなかから集水域に至るまでの自然・人文にわたる諸々の話題が取りあげられている。院生の場合も同じような依頼の仕方したが、多くは修論でとりあげたテーマがコラムに反映されている。もう一つは、院生の中で課外活動に積極的に関わっている場合にはその内容を紹介するとか、折々に学外のイベントに主体的に関わった場合にはその内容を書くように依頼したので、時事的な雰囲気や状況を反映させたコラムも顔を出している。

コラムをみていくと、それぞれの分野で基礎となる見方や考え方をわかりやすく説明しているものに出会う。それもそのはずで、もともとこのコラムは小学校5年生から中学校2年生くらいまでの児童・生徒が読んでわかるものを書くというのが中日新聞からの依頼であった。こうしたわかりやすい解説文を、各学科の教員が一挙に書いてまとめるということはなかなか困難であるが、すでにコラムには素材がかなり蓄積されている。これをまとまった形に編集すれば、それだけで琵琶湖と環境に関する基礎的事項について一定の知見を得ることができる。さらに、項目によっては必要な説明や資料を加えて「環境ブックレット」に仕上げていくことも可能であろう。登山において、麓からの出発ではなく、四合目からの出発が可能な地点にいることを確認しておきたい。

3. 比較の素材として

このコラムがもっている可能性は、以上のようなもののほかに、書かれたものが過去のある時期のも

のであるということからくる場合もある。それを、私のケースでご紹介しておこう。

私は、このコラムが始まった時、最初の4回を執筆した。その後、1年ほどを経て、2度目の執筆に関わった。この背景には、連載過程で次の執筆者がすぐには見つからなかったため、つなぎの役割を果たすために執筆をすることになったという事情がある。当時、1990年代の後半から進めてきた琵琶湖沿岸域に関する調査・研究が終わったところだったので、その成果をもとにコラムを執筆した。執筆時期は2001年11月から2002年3月にかけてなので、今から見ると10年以上前のことである。

今回、この原稿を執筆するに当たって当時のコラムを読み返してみると、現在、沿岸域研究のまとめを行っている際につきあたる問題のいくつかは、当時すでに言及していたことを改めて確認できるのである。たとえば、沿岸域の呼び名は、水辺（みずべ）、渚、水際（みずぎわ）といったもののほか、湖岸、湖辺（こへん）といったものもあって、多様である。さらに、これらのことばを用いる人によって、そのイメージも意味も多様である。それらを踏まえた上で、私はこのコラムでは沿岸域ということばに統一して用いることにする旨を述べている。一般の読者が対象である（しかも小学校5年生から中学校2年生までの児童・生徒を意識して書くという条件がある）ということを知りつつ、あえてこうした定義をした上で15回の連載に臨んでいた。沿岸域を表現することばは多様に存在し、それぞれのことばは人によって異なったイメージで受けとめられることがあり、そのゆえに意味も微妙に異なるという状況を突き抜けて、研究の成果を示すためにはあえて概念規定の問題に言及せざるを得ないと判断していたように思う。沿岸域（とそのことば）をめぐる状況は、今も基本的には変わらない。このことは、沿岸域研究の成果をどのような形で、またどのような表現で公表していけば良いのかという問いを考える際に、この主題とことばをめぐる岩盤のかたさを再確認させられる良い契機となっている。

もう一点、このコラムを執筆した当時は、まだ生態系サービスということばは一般に知られてはいなかった。また、生物多様性ないし生物多様性保全ということばも生物学の研究者や政策担当者には知られていたが、今日のような形では普及していなかった。したがって、このコラムには、これらのことばは用いていない。現在であれば、その後10年余の時間の経過のなかで生物多様性や生態系サービスをめぐって展開した研究や実践の成果を示すことになるであろうが、当時は沿岸域の事象をそれとは別の

表現を用いて同じような問題に言及していた。これは、環境研究の流れと琵琶湖研究の流れを統合して整理しようとするときに、いろいろな示唆を与えてくれる。図らずも比較の素材を手にすることができるというのが、コラム執筆の思わざる成果であった。

また、コラムに書かれている事実は、10年ほど前のものである。コラムで使用されている写真も、10年ほど前のものになる。したがって、その後、取りあげた対象の変化があると、現在のそれとを比較する素材がコラムから得られることになる。これは私の書いたコラムだけでなく、多くの執筆者にとって該当するであろうから、用い方次第で活用の可能性は高いとみることができる。

4. 契機としての環境フィールドワーク

このコラムは、注でも触れたように、環境フィールドワークⅡ・Bグループ（環境負荷の少ない地域づくり）の現地調査に関する記事が、当時中日新聞彦根支局長であった水谷さんの目にとまったことが契機となって始まっている。環境科学部が発足する際、環境の研究と教育においてフィールドワークは不可欠であるという創設関係者の認識によって、フィールドワークは学部教育の中核に位置づけられていた。開学以来、環境科学部ではこのフィールドワークを積極的に「環境フィールドワーク」と命名し、実践を続けてきた。その過程でこの経験を学内外に広報し、「環境科学部の行う環境フィールドワーク」は徐々に知られるようになっていた。水谷さんによるコラム執筆の提案は、こうした環境フィールドワークの実践に新たな局面を開く契機となっていった。

コラムの執筆に環境フィールドワークの成果を盛り込んでいくという目的をもって、執筆の依頼をしたケースが少なからずある。それが実現した場合もあれば、うまくいかなかった場合もあるが、これを通じて環境フィールドワークの成果をまとめる必要があるし、その意義もあるという認識が環境フィールドワーク委員会のメンバーを中心に芽生えていくことになった。これは、その後紆余曲折を経て、2007年3月に環境フィールドワーク研究会編『琵琶湖発 環境フィールドワークのすすめ』（昭和堂）の発行として結実した。

コラムのその後という視点で見れば、「環境ブックレット」の発行もコラムと直接・間接に関わっている。「環境ブックレット」は、『琵琶湖発 環境フィールドワーク』を発行した後、環境フィールドワ

ークだけでなく環境科学部の教員が行っている研究や教育の成果を一般の市民にわかりやすく伝えていこうという意図が刊行の1つの誘因となっている。この意図は、他ならぬ中日新聞のコラムが目指した意図と重なるものである。その点で、コラムの趣旨は「環境ブックレット」に引き継がれたといえよう。

趣旨が引き継がれただけでなく、コラムの記事がもとになって「環境ブックレット」が刊行されたという例もある。倉茂好匡さんの『琵琶湖のゴミ 取っても取っても取りきれない』（環境ブックレット1、サンライズ出版、2009年）は、コラムの記事を元にしたものであり、迫田正美さんの『環境と人間 生態学的であることについて』（環境ブックレット4、サンライズ出版、2011年）の後半部分には、コラムで扱った事例が使用されている。

このような形でコラムの記事をブックレットに仕立て直すことができる候補は、結構あるのではなかろうか。著者本人がそれほど自覚していなくとも、第三者の目を通してみると、コラムの記事に加筆し、資料を加えることによって、読み応えのあるブックレットができあがる可能性は少なくないと思う。本稿の文末に掲載した執筆一覧は、こうした観点からも活用されていくことを期待したい。

一注一

1) 2000年11月から、中日新聞土曜日の子供欄で「琵琶湖と環境」という約600字のコラムが始まった。このコラムの執筆を依頼してこられた中日新聞彦根支局長の水谷良因さんは、ちょうどその年の夏から湖国21世紀記念事業協会が出版を始めた季刊誌『夢～舞（む～ぶ）』の創刊号に、環境フィールドワークⅡ（環境負荷の少ない地域づくり）のエクスカッションに関する記事が載っていたのを目にされて、この企画を考えられたとのことであった。

環境科学部のメンバーが、主として小学校5年生から中学校2年生あたりまでを対象に、琵琶湖と環境に関する話題を自由に書いて欲しいというのがその趣旨であった。そこで、私が皮切りに4回琵琶湖に関する話題を書いた後、院生の北川裕樹君にバトンタッチした。同君は、修論に琵琶湖のエリをとりあげていたから、その話題を紹介した。以後、環境科学部の教員や院生がリレーで自然から社会や文化にわたる話題を書きつなぎ、2001年11月で1周年を迎えることになった。

週1回だから、1年たって50枚ほどの記事ができあがったことになるが、このテーマで書くとそれで

尽きるということはなく、11月から2ラウンド目に入っていった。そこで、「この一年」というと、まず頭に浮かぶのが現在進行形のこの企てであった。連載開始の頃は、1年というと相当長く感じられたものだが、終わってみるとまた違った感覚にとられる。

小学校高学年から中学生を対象に書くというのが、執筆時に逡巡する一つの壁である。すでに執筆されたメンバーのなかにも、これに手こずった方がいたかもしれない。執筆に当たって心がけたのは、①なるべく専門用語を使わない、②なるべく細かい数字を使わない、③なるべく外国語を使わない、といったことだろうか。

執筆内容の趣旨が、肝心の読み手に届いたかどうか、まだ確かめたことはない。執筆メンバーの記事を読んでいると、これは届きそうな文章だなど思えてくるものに遭遇することがある。いわば、別の可能性を見するという機会ともなったようだ。文字通りの試行錯誤にあるとはいえ、環境教育や環境学習の接点にいる身にとっては良い経験であった。